

北海道追分高等学校

課 程 全日制
学 科 普通科
生徒数 91名

1 取組の特徴

スクールカウンセラーやパートナーティーチャーを交えた事例検討会や集団カウンセリングに関する教職員研修を通し、教職員のスキル向上を図るとともに、生徒への支援を実施

2 取組のねらい

- 1 生徒集団の実態把握と集団に応じたコミュニケーションスキルアップ研修の検討と実施（SC、PT参加）
- 2 教職員によるグループエンカウンターやピア・サポート研修の実施と継続
- 3 生徒のコミュニケーションスキルアップのための場を確保し、自己表現力有用感を向上

< 組織図 >



3 取組の経過

- | | |
|---|---|
| <p>4月 ピアサポート研修
生徒会役員学級代表</p> <p>5月 ピアサポート研修
生徒会役員学級代表
教科学年生活会議（SC、PT参加）</p> <p>6月 校内研修（SC講師）
学級反省と目標の設定
ボランティア活動（グループホーム夏祭り）
インターンシップ（2年）</p> <p>7月 学校祭係活動
ボランティア活動（グループホーム夏祭り）
子ども理解支援ツール実施 1・2年</p> | <p>8月 子ども理解支援ツール実施 教員</p> <p>9月 校内研修（SC、PT参加）</p> <p>10月 グループエンカウンター1年（SC講師）
見学旅行グループ活動</p> <p>11月 宿泊研修 グループエンカウンター（担任）
ピアサポート研修2回</p> <p>12月 教科学年生活会議（SC参加）</p> <p>2月 子ども理解支援ツール実施1・2年</p> |
|---|---|

4 取組の内容

1 教科学年生活会議における研修と情報共有

- (1) ねらい 専門家（SC、PT）を交え、前期・後期の生徒の様子について情報交換し、学級集団と生徒一人一人へのアプローチの方法を検討・実践する。
- (2) 対 象 教員 スクールカウンセラー パートナーティーチャー
- (3) 内 容 教科学年生活会議の実施
 - ・新入生の様子について情報交換（5月29日）
 - ・1年間の生徒の成長と今後の課題について情報交換（12月14日）
 - ・校内研修「予防開発的学級指導の取り組みについて」
講師 大友秀人氏（9月25日）
- (4) 成 果
 - ア 全教員で生徒の様子について共通理解を図ることができた。
 - イ 課題への対応策について専門家からの助言を得て、個別面談や学級づくりに役立てることができた。

2 グループエンカウンター

- (1) ねらい 宿泊研修に向け、固定化したグループを越えて学級内で交流することの促進を図り、人間関係をリセットすることにより温かい学級づくりを推進する。
- (2) 対象 1年生全員（伊達市大滝セミナーハウス）
- (3) 内容
 - ・宿泊研修に向けてのリハーサルとしてのグループエンカウンター
講師 大友秀人 氏
内容 ジャンケン列車・トラストアップ
 - ・宿泊研修における担任によるグループエンカウンター
内容 ジャンケン列車、バースデーチェーン、トラストアップ、危機からの脱出、私が学校に行くわけ
- (4) 成果
 - ・クラスの交流が深まり、グループ別討議では、自主的に自分の意見を発表するなど、活発に発言する場面が見られた。
 - ・教師の道德教育への意識の高まりとともに、生徒の自己肯定感や他者への関心の高まりが見られた。
- (5) 生徒の感想
 - ・自分の意見だけでなく色々な人の意見を聞いて答えを出すことが大切だとわかった。（男子A）
 - ・話し合いは大事だと思った。それと、協力して行動できるようになった。（男子B）



3 ピアサポート研修

- (1) ねらい コミュニケーションスキルアップトレーニングを通し、ピアサポーター力を付けることで仲間の援助活動を行うことができるリーダーの育成を図る。
- (2) 対象 生徒会役員・学級代表
- (3) 内容 計4回実施 自己紹介・他己紹介、傾聴訓練、エゴグラム、聴く態度（カードによるエクササイズ）



5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 子ども理解支援ツール「ほっと」結果（6月・2月実施）
 - ・1年生 ～ 6月と2月の調査結果を比較すると仲間づくりに関する項目（自分から仲間に加わる・共通の目標に向かってみんなと協力する）の数値の向上が見られた。
 - ・2年生 ～ 仲間づくり・思いやりの項目（困っている人のために思いやりのある行動を取ることができる。相手の趣味に関心を持つことが出来る。）の数値の向上が見られた。
- (2) 保健室来室数及び一人当たりの欠席日数
 - ・保健室利用者数が、平成23年度と比較して半減した。
 - ・生徒一人あたりの欠席日数が、平成23年度と比較して半減した。
- (3) 生徒の変容した姿
グループエンカウンターやピアサポート研修を通し、人との関わりに苦手意識のあった生徒が仲間との関わりに前向きになった。また、学校祭や見学旅行・宿泊研修におけるグループ活動では、各クラスのリーダーがピアサポーターの役割を自覚し、まとめ役として力を発揮した。

2 課題

- (1) 生徒支援ツール「ほっと」の結果から生徒の意識と教師の意識に差が見られたことから、教師の実態の見立てと目指す目標を再確認し、実態に応じたコミュニケーションスキル育成プログラムを作成する必要がある。
- (2) 教職員の実践内容を生徒の自己実現に向けたプログラムとして統括し、コミュニケーションスキル向上の取組を学校全体で継続していく必要がある。

3 次年度に向けて

今年度の実践を活かし、生徒の実態把握を一層推進するとともに目指す目標に向けコミュニケーションスキル向上の取組を継続していく。